
妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

【EZコード】

N3941Z

【作者名】

たすべく

【あらすじ】

「來い」の一言が書かれた手紙を持って現れたのは、蔵馬（南野秀一）だった……！ 新世紀エヴァンゲリオンと幽遊白書のクロスオーバー作品。碇シンジの位置に蔵馬（南野秀一）。他のキャラも登場予定？

自サイトより転載。2000年ごろ書いた『妖世紀エヴァンゲリオン - Ayakashi Genesis Evangelion -』のリメイク版です。内容的には変わってないかと思われま

すので気を付けてください。

第壹話 転生

魔界と靈界。

魔界とは、数々の妖怪が住む世界。

靈界とは、『あの世』と呼ばれる世界。

魔界は、何階層にも別れており、上層部の一部を靈界が管理している状態である。

その管理している階層において、靈界の法における犯罪を犯した妖怪を退治する『ハンター』と呼ばれる存在がいる。

その『ハンター』が今、魔界において一匹の妖狐を追い詰めていた。

「俺としたことがつ！－！」

銀髪の妖狐がハンターから逃げていた。

ハンターの靈的攻撃のため、体のところどころに怪我を負っていた。

「…」のままではまずい。確実に殺されると

ハンターは、犯罪者を捕えて法に照らし合わせて裁くといつより、
その場で狩る（処刑）することが多い。

妖狐は魔界を脱出し、人界に向かう。

しかし、ハンターはまだ追つてきていた。

そして致命的な一撃を受けた。

「ぐあ…　…」までなのか…

妖狐の意識がとぶ直前、目の前に穴が見えた。

「…！」

穴に吸い込まれ、妖狐の意識がとんだのだった。

「俺は…
そんな事が…」

動けない体。

「これは……」

妖弧の意識が戻る。

目の前にいるのは人間の女性だった。

妖弧は人間として転生したのだった。

時に2000年…

伝説の極悪盗賊と呼ばれた妖弧藏馬は人間として生を受けた…

第貳話 第三東京市

2015年……

あれから15年……

親戚の家に預けられていた藏馬は、人間としての父である人物から手紙を受け取る。

『来い』

その一言と、謎の女性の写真。

(いつたい今更、何のようだう。関わりたくないんだけど……)

そう思いつつも行ってみることにした。何となくだった。

これが苛烈な戦いの始まりだったのである。

そして、藏馬が、第三東京市につき、ロニアを降りたときだった。

『本日12時30分、東海地方を中心とした、関東地方全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の方々は速やかに指定のシエルターに避難して下さい。繰り返します……』

「特別非常事態宣言? それはなんだう。今の状況では判断できない。まあ、手紙に書いてあるところに電話して、情報を集めよう。動搖するところか、冷静になつた藏馬は、封筒に書かれた電話番号で、電話をしてみる。

『特別非常事態宣言発令のため、現在通常回線は全て不通となつ

ております。繰り返し……』

「不通か」

とりあえず、状況を判断すべきその場を動かず、周りを見回す。人っ子一人いないが、変わった様子は見られない。そして、上を見上げると、普通では飛行していないモノを発見した。

戦闘機だ。

「ん……？」

よく見ると攻撃をしているようだ。かなり遠くに煙が上がっている。

（戦争でも始まったのか？）

煙が少しづつ晴れていく。そこには巨大なモノが見え始めた。人型したモノだった。

（妖怪……？ ではなさそうだが。）

そう思つて見ていると、一台の車が走つてくる。

その車が、蔵馬の前に止まり、一人の女性が出てきた。

「南野秀一君ねつ……！ 遅れてゴメンンツ……！ 乗つてつ……！」

「葛城ミサトさんでいいですね？ あれはいつたい何ですか？」

（あの「写真の女性だな。）

「落ち着いているわねシンジ君。 あれはね、使徒よ

「使徒？」

「そつ……つて、NN地雷つ！ 伏せて秀一君つ……！」

ミサトは蔵馬を抱えて車の中で伏せる。同時に大爆発が起き、その爆風で吹つ飛ぶ車。

「大丈夫だつた？」

「ええ。砂が口に入つたくらいです」

「そいつは結構。じゃ、行くわよ」

ミサトが横倒しになつた車を元に戻そうとするが、女性一人では持ち上るわけがない。蔵馬も手伝い起こした。

「ありがとう。意外にパワフルなのね。よろしく。南野秀一君」

「いらっしゃい。葛城さん」

「ミサト、でいいわよん」

そのころ、ネルフ作戦本部……

「ミサイル攻撃でもきかんのか！？ 全弾直撃のはずだぞ！…」

「クソガッ！…」

目の前のモニターには、いつさいの攻撃を受け付けないモノがうつっている。使徒と呼ばれるモノ。

その使徒を何とかしようとしてる軍人たちの後ろにサングラスの男と初老の男が立つてゐる。

軍人たちが何処からの通信を受け取り、苦々しい顔しながら、その二人にいる後ろを向いた。

「南野君。これより本作戦の指揮権は君に移つた。お手並みを見せてもらおう」

「了解です」

サングラスの男が言う。

「南野君。我々の所有兵器では目標に対し有効な手段が無いことを認めよづ」

「だが、君なら勝てるのかね？」

日々に言う軍人たち。不快感は顔に浮かんでいる。

「そのためのネルフです」

南野は確信を持って言った。

「期待しているよ」

「軍人たちにはテーブル」と本部から退場した。

「国連軍もお手上げか。どうするつもりだ?」

南野の横に立っていた初老の男が口を開いた。

「初号機を起動させる」

「初号機をか? パイロットがいないぞ」

「問題ない。すぐに秀一が来る」

(しかし、何故だ… 私が入手した死海文書の予言より、一年遅い… 何か不確定要素でも入ったのか…)

第参話 特務機関ネルフ

「特務機関ネルフ？」

「そ。国連直属の非公開組織」

「父がいるところですね？ 僕に何をさせらるつもつですか？」

「それは、お父さんに会つて聞いた方がいいわね」

「そうですか」

（国連直属： 情報統制は相当のモノのようだ。）

（取つつき難い子ね。でも、なんで長髪なのかしら？ 似合つているから良いけど。）

しばらく一人で無言で道を進む。が、ミサトは道に迷つてしまつたようだ。

「ここ、さつき通りませんでしたか？」

「「めえん。まだ道になれてなくて」

「……ですか」

冷めた目で見られたのは、ミサトの見間違いではなくそういう気がした。

（なんて、冷静…）

「さつき通りましたね。」

「…」

ミサトは何も言えなかつた。

それからじゅうくウロウロとつ表現が正しいこと思つべつ、じゅうく道を進む。一人はもちろん無言だ。

（組織員としては、迷子とは失格だな。）

蔵馬のミサトへの第一印象はよくない。そこへ後ろから一人に声がかけられる。

「どこへ行くの？ 葛城一尉。」

ミサトと蔵馬が同時に振り向く。白衣を着た金髪の女性が立っていた。

少し冷たい感じのする美女だった。

「遅かったわね。」

「ごみいん！」

ミサトが顔の前で手を合わせ、謝る。

「例の男の子ね。」

「そう、マルドウック機関から選ばれたサー・ド・チルドレン。」

「わたしはネルフ技術一課E計画担当博士赤木リツコ。よろしく。」

「南野秀一です。よろしく。」

すまされないわ」

「一人の会話に我かんせすの藏馬だったが、ふと藏馬は一つ思った。

（たぶん父さんが呼んだのは、このためだな。）

藏馬はミサトとリツコにある部屋に入る。ミサトが入り口を閉めると真っ暗になつた。

「真っ暗ですよ」

リツコがスイッチを押す。

ライトがつき、藏馬の眼前に巨大な鬼のような顔がある。
(靈氣も妖氣も感じない。いわゆる巨大ロボットというモノなのが。)

「ロボットと思ったと思うけど厳密に言つとロボットではないわ。
人の造り出した汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機」

（人造人間……？）

「これが父の仕事ですか？」

「そうだ」

エヴァの頭上から声がかけられた。管制室と思われる部屋のグラス越しに自分の父親、南野ゲンドウを見つめた。

「久しぶりだな」

「…………」

「……出撃」

ゲンドウがつぶやく。

「出撃！？ 零号機は凍結中でしょ！？ まさか、初号機を使うつもりなの！？」

「他に方法はないわ」

「だつてレイは動かせないでしょ？」

ミサトは藏馬をチラッと見る。

「パイロットがないわよ」

「やつを雇いたわ」

「…マジなの？」

リックはミサトから藏馬に視線を移す。

「南野秀一君。あなたが乗るのよ」

「お断りします」

「即断なのね…」

「俺はよくわからない状況では流されないんですよ」

「座つていればいいわ。それ以上は望みません」

「お断りします」

「秀一君…！」

「正規のパイロット？がいるでしょ？　その方が乗れば良いんじゃないんですか？」

何も言えなくなってしまったリック。そこへゲンドウから一言。

「…そつか。冬月、レイを起こせ」

しばらくして、廊下から包帯で巻かれた少女が運ばれてくる。ナサトが何か言つと苦痛の表情で起き上がりつゝするが、痛みか、すぐ倒れこんでしまう。

(…… 出規のパイロット? が、この状態で乗せようとするのか。)

それを観察している藏馬。少女は何度も起き上がりつゝするが、すぐ倒れてしまひ。包帯から血が滲み始めていた。

(…… 怪我の治療は適当、いや出鱈田だな。)

(…… 父さん、こやあの野は向を考えてこる。俺を乗せるための作戦か?)

(…… わいわいと騒つたといふのなんだけビ見捨てる」とせだめないな、よー。)

「彼女をのせるのですか? ナサトさん?」

少し冷たい声をミサトにかけた。

「そうよ」

「では、俺が乗れば彼女をちゃんと治療してくれるのですか?」

「え?」

「傷口が開いているようですか? 出血が酷い」

ちらりと少女を見る藏馬。

「…… わかったわ

「了解。…… 父さん」

少女から、ゲンジウの方へ目を移す。

「なんだ?」

「後で理由を聞く」とこいつ

「…………」

「…………えつと、それではどうすればいいんでしょうか？」

蔵馬は、声のトーンを少し上げミサトに聞いた。答えたのはリ

ツコだ。

「私が教えるわ。ついてきて頂戴」
「わかりました」

「停止信号プラグ。排出終了」

「了解。エントリー・プラグ挿入」

「第一次接続開始」

「エントリー・プラグ、注水」

エントリー・プラグ内を黄色い液体が満たされていく。

蔵馬は着の身着のままの制服姿だ。黄色い液体で濡れていいくのは多少気持ち悪い。

「何ですか？ この怪しい水のようなモノは
ゆっくりと黄色い液体が上がってくる。感触はあまりよろしく
ない。

「「「」と呼ばれるモノよ。大丈夫。肺が「「」で満たされれば直接血液に酸素を取り込んでくれるわ。すぐに慣れるから」「慣れたくないですね」

「…… そう」

(結構毒舌家なのね。きれ~な美少女顔して~るのにね~。女装すればモテモテなんじゃないのかな~。)

場違いの事を思つミサトだったが、すぐ気持ちを入れ替えた。(その辺の事は生き残つてからにしましょつか。)

「ここに満たされながら、蔵馬は違和感を感じた。

（妖氣でも靈氣でもない… 何かいる…）

「A 10 神経接続開始」

（神経接続？ 思つた通りに動かすことができるのか？）

「思考形態は日本語を基礎原則としてフィックス

「初期コンタクト問題なし」

「シンクロ率…………え？」

オペレーターの一人が目を疑う。

「どうしたの？」

「あ、すいません。シンクロ率、78・27%」

「なんですか？」

その報告を聞いて、リツコが驚愕する。初めて乗った人間が出せる数値ではなかったのだ。

「計測器は？」

「全て正常です」

オペレーターが機器のチェックを行うが、異常はなかった。何度も確認するも異常はなかった。何

「…………すごいわね」

驚きの声を上げるミサト。

「ハーモニクス、全て正常位置。暴走、ありません」

「いけるわ、発進準備！！！」

ミサトの号令が響く。

そして発進準備が一通り終わると、ミサトはゲンドウの方を向いて聞く。

「かまいませんね」

「もちろんだ。使徒を倒さぬ限り我々に未来はない」

それを聞いて無言でうなづくミサト。

「発進！！」

すさまじいスピードで打ち上げられる初号機。そして地上に射出される。

しかし、場所をわかつていたかのように、使徒が現れた。

（えういえば、作戦聞いていなかつたな……）

Hントリープラグ内の藏馬。

「敵の前に出されても困るのですが」

『う』

「確かに作戦もないですよね?」

『う』

「次回があるかどうか知りませんが、その時はひやんとしてくだけてこい」

『……はい』

『何やってるのかしら? ミサト?』

『通信にリックが割り込んでくる。』

『リックさん? とりあえずどうすればいいのでしょうか?』

『秀一君。まずは歩くことだけを考えて』

「了解」

藏馬は歩く事を考へるとH'ヴァは使徒に向かつて歩き始める。

(なるほど)

目の前に待ち構えた使徒がビームをエ'ヴァに向かつて発射。間

一髪かわすと、後ろのある射出口のある建物が蒸発した。

(危ない危ない。しかしアレはなんだ? 妖怪の類ではないつだが。)

ビーム発射後、ジャンプしていたであつた使徒が空から降つてくる。そして、頭を驚撃みにされた。そのまま、地面に叩き付けられる。

「ぐつー?」

(叩き付けられたのはH'ヴァとかいうロボットの頭だ。なのに何故俺までダメージが来る!?)

(……そつか、ダメージもフィードバックされるといづのか。)
使徒の胸部を攻撃し、なんとか拘束から逃れる。

今の一撃でエヴァ頭部が損傷したらしい。赤い液体が流れ出していた。

『生命維持に問題発生！ パイロットが危険です！』

ミサトはこれ以上の戦闘はムリと判断した。

『作戦中止！ パイロット保護を最優先！ プラグを強制射出して！』

「待つてください」

しかし、オペレータたちの了解の言葉より先に蔵馬の声が発令所に響いた。

『秀一君！？』

「これの操縦のコツがだいぶ判つてきました。大丈夫です」
助走して使徒へ殴りかかる。しかし、壁のようなモノで弾き返される。

弾き返された瞬間、八角形の波紋のようなものが流れた。

(なんだ今のは？)

くるりと一回転して、着地した。

『A・T・フィールドと呼ばれるものよ。詳細は残念ながらわかつてないわ』

リックから通信が入る。

『えーといーふいーるど？』

『現時点ではわかっていることは、壊さない限り使徒には近づけない、それだけよ』

「……わかりました」

使徒はA・T・フィールドを張つたまま、突つ込んできた。対応しようとしたとき、突然制御不能に陥つた。

……ドクン……

そして吠えた。

「ウオオオオオオオオオオオオオーンンンン！」

（何！？ 突然動かせなくなつた。頭部破壊で異常発生したのか。）

襲い掛かる使徒のA・T・フィールドに手をかける。そして、と無理矢理こじ開け始めた。

「グルルオオオオアアアア！」

完全にこじ開けると中に飛び込む。

そのまま使徒の腹部にある球体に一撃を入れた。使徒のA・T・フィールドが消失し、球体にヒビが入る。

何かを感じたのか、使徒がぶるつと震えるとエヴァに抱きついた。

（！？）

球体に光が集まりだした。

（これは一体！？）

閃光とともに大爆発が起きる。エヴァと周りの町もろとも・・・

「使徒が自爆しました！！」

「初号機はつ！！」

「初号機を確認！！ パイロット生存！！」

「ほつ…… よかつた。回収班および救急隊の出動を要請して」

「はいっ！」

「南野、勝つたな」

「ああ」

目の前のモニタには、後始末が行われていた。もちろん、この事実は隠蔽される。

突如、司令室の暗くなり、番号の書かれた謎の板が姿を現す。

「使徒再来か。あまりに唐突だな」

「15年前と同じだよ。災いは突然訪れるものだ」

「幸いとも言える…… 我々の先行投資が無駄にならなかつた点においてはな」

「そいつはまだわからんよ。役に立たなければ無駄と同じだ」

「左様。もはや周知の事実になつてしまつた使徒の処置」

「情報操作、ネルフの運用は全て迅速かつ適切に行つてもらわないと困るよ」

「その件に関しては既に対処済みです。ご安心を」

「しかし南野君。ネルフとエヴァもう少しうまく使えんのかね」

「左様。零号機に引き続き、君らが初陣で壊した初号機の修理代。

国が一つ傾くよ」

沈黙の幻童。

「聞けばあのオモチャは君の息子に与えたそうではないか

「人、時間、そして金。親子そろって幾ら使えば気が済むのかね」

「それに君の任務はそれだけではあるまい。人類補完計画。これ

こそが君の急務だ」

「左様。これこそがこの絶望的状況下における唯一の希望なのだ
よ。我々のね」

「いずれにせよ。使徒再来による計画の遅延は認められん。予算
については一考しよう」

「では、後は委員会の仕事だ」

「南野君。ご苦労だったな」

「南野…… 後戻りはできんぞ」

第陸話 ゲンドウ

Hヴィアの暴走もあり、精密検査を行つため、蔵馬はネルフ直属の病院に来ていた。

検査結果が出るまで、廊下のソファで待つことになる。

(とりあえず、父さんから話を聞こい。判断はそれからだ。)

しばらくして、名前を呼ばれて結果を聞く。問題はなかつた。ありがとうござります、と診察室を退室した蔵馬はそのままエレベーターへ向かう。

そこにはゲンドウが立っていた。

「父さん」

「ついて来い」

そう言つとHレベータに乗る。その後へ蔵馬も乗る。

「戦闘前に言つた話をしたいんですけど」

「今から司令室へ向かう。ここでは無理だ」

「わかった」

司令室につくとそこにはすでに冬円がいた。

「秀一君、大丈夫かね？」

「検査結果は問題ないようですが」

「それはよかったです」

ゲンドウが席につき、蔵馬は指令席の前に立つた。

「話してくれますか？」

「アレは使徒と呼ばれる人類の敵だ。詳細はわかつてない」

「敵と判断した理由はなんですか？」

「攻めてきた以上、対抗せざるを得ない」

「目的も不明ですか」

「ああ」

蔵馬はため息をついた。呆れたからだ。

「まあ、今はいいじょう。何かわかつたら話してくれますか？」

「……良いだら」

(隠し事満載ですか)

ゲンドウが詳細は知っているようだが話そつとしない。薄々と感づいていたが顔に出さない蔵馬。

「帰るのか？ 帰るのではあれば多少監視を付けざる得ないが（非公開組織だから、仕方がない。いざとなればいくらでも誤魔化せる。しかしながら、俺自身も興味がわいたのは確かだ。条件付きで乗る）。」

「……条件付きでよければ乗りますよ」

「その条件とは？」

「まずは住居。監視付で構わないのマンションあたりをお願いします」

「問題ない。すぐ用意する」

「そして使徒。何かわかつたら話してください」

「機密以外は伝えよう」

「機密が多くすぎるような気がしますけど」

「……」

「後は、俺が何をしようとも不干渉でお願いします」

「不干渉だと」

「さすがに一日中干渉されるのは嫌ですからね」

「わかった、問題ない。冬月」

「すぐに準備するでしょう。それでいいな、南野」

蔵馬には冬月に丸投げしたように見えた。

「父さん、丸投げはよくないですよ」

「……」

半田もたたず、住面であるマンションの一室のカギが渡される。場所は、ミサトの住むマンションと同じ階であり、隣同士ではない。

（親睦を深めるという意味もあるし、監視という意味もある。離れているのは俺が年頃の男だという事か。興味もないが。）

第三東京市立第三東京高校への転入が決まる。ここは、もちろんネルフ支配下にある学校だ。

美形の転入生徒とあって、女生徒は黄色い声を上げ、男子生徒は嫉妬の声をぼそつと上げた。

（高校生活が楽しめると思えないが、まあいいか。）
（しかしながら、蔵馬はそう思つだけだった。）

使徒が来ない間は、一学生として高校へ通う蔵馬。そして、授業が終わるとその足でネルフへ向かう。

名田上は戦闘訓練だらう。ゲンドウからすれば息子の調査であり、

蔵馬からすればネルフの調査である。

どちらも詳しいことがわからないまま。

(…………俺と志保利の子であることは間違いない。しかし……)

(組織が組織だけあって、監視カメラが多いな。しかも俺を探している気配もある。父さんか、ここが気に入らない連中だな。)

その日の訓練でエントリー・プラグ内にいた。シコミレーション用だが、本物と変わりがない。

『おはよう。秀一君。調子はどう?』

リックより通信に入る。

「悪くはないです」

『それは結構。エヴァの出現位置、非常用電源、兵装ビルの配置、回収スポット。全部頭に入ってるわね?』

「はい。」

『では、おさらいするわね。前にも言ったけど、通常、エヴァは有線からの電力供給で稼働しています。でも非常時に体内電池に切り替えると、蓄積容量の関係でフルで一分。ゲインを利用してせいぜい5分しか稼働できないの』

(……ウルトラマンですか、このエヴァといつ兵器は。)

『では、インダクションモードの練習、始めるわよ』

通信が切れるどビル群からこの前初号機が殲滅した使徒が姿を現す。蔵馬は無言のまま、パレットガンから銃弾が照射される。そして、見事に命中。倒れる使徒。

『その調子よ。次。』

(こんな武器が通じるとはとてもじゃないが思えないな……)

ほぼ100%の命中率を見せる蔵馬。

ガラス越しからリツコ、オペレーターの一人伊吹マヤ、その後方でミサトがその様子を見ている。

「しかし・・・ よくまた乗ってくれる気になつてくれましたね。

彼

マヤがリツコに言つ。

「あの子は強いわ。 あの程度でくじけたりしないみたいね」
（でも、何かがおかしい。射撃の腕はゲーセンでと言つていたけど、調査ではそんなのなかつたし...）

ミサトは無言で初号機を見ているだけだった。

第漆話 逃げ遅れ

前回使徒が現れて数日後、通常通り蔵馬は高校で授業を受けている。

教師が何時ものように脱線が始まった時間、蔵馬の携帯が鳴った。ネルフより持たされた携帯である。

教師に一声かけると廊下へ出る。教師も蔵馬がネルフ関係者と知つてるので「わかつた」しかわなかつた。

電話を見ると『綾波レイ』と表示されている。彼女との接点は少ない。ゆえに電話も今回が初めてであつた。

「もしもし」

電話に出る蔵馬。

『私』

簡潔すぎる返答。

「何かあつたんですか？」

『非常召集。先、行くから』

そう言つと電話が切れた。と、同時にサイレンが鳴り響いた。

ネルフ作戦本部

『総員第一種戦闘配置！』

冬月の命令が飛ぶ。ゲンドウは不在。

『了解。総員第一種戦闘配置。地対空迎撃戦用意』

『碇司令の留守の間に使徒の襲来か。意外に早かつたわね』

「前回は15年のブランク。今回はたつたの三週間ですかね」

オペレーターの一人、日向マコトが答える。

「いっちの都合はお構いなしか。女性に嫌われるタイプだわ」

主モニターには使徒を攻撃する様子が映し出されている。しかし、ミサイルも銃弾も第三使徒同様まるで効果が見受けられない。

「税金の無駄遣いだな。」

冬月が半ば呆れた表情で言つ。

「葛城一尉！！ 委員会からエヴァンゲリオン出動の要請が来てます！！」

青葉シゲルが叫ぶ。

「うるさい奴らね。言われなくとも出撃させるわよ。」

レイが到着し、蔵馬が続いて到着する。

「秀一君、悪いわね」

「作戦ありますか」

「ううん。ライフルで牽制して様子見るしかなわいね」

「前回から何もわからなかつたんですか？」

「映像を見てもらえればわかるわ」

モニタに外の様子が映し出される。そこにはイカの胴体のよくなモノが暴れていた。

「なんですか、あれ」

「使徒よ」

「前回とまったく姿が違いますか……これは厄介ですね」

「ゴメンネ。」

「時間稼ぎますから、対処法お願いします」

「わかつたわ」

蔵馬はエヴァに乗り、使徒より離れた場所に射出された。

ビルを背に相手の動きをうかがう。

(あのビームの件もある。距離を取りつつ牽制ぐらいしか出来ないかな。)

ネルフではなく藏馬自身で判断した距離を保つ。しかし、うまく隠れているつもりであったが、突如使徒にエヴァの居場所がばれた。

エヴァの方へ移動してくる使徒。それをパレットガンで迎え撃つ。着弾と建物の崩壊で、煙があたりを包んだ。目の前が見えなくなる。

(しまった!)

煙から鞭のような腕(?)が飛び出し、エヴァが持っていたパレットガンを真っ二つにする使徒。

(これがヤツの武器か。)

『予備を出すわ! 受け取って!』

即座にミサトはエヴァのいる近くのビルからパレットガンを射出。それを受け取ろうとした初号機だが、使徒によつて阻まれてしまつ。

その一瞬がスキとなり、電源コードを切断される。

『初号機! 活動限界まであと4分53秒!』

(なんという反応速度の速さだ。エヴァに不慣れの俺だと追いつけない。)

さらに使徒の腕が初号機の足を捕らえる。そのまま持ち上げると投げ飛ばされた。

町はずれの神社。エヴァはそこへ落ちた。

(見かけ以上にパワーはある。……ん?)

システムがエヴァの足元に何かあることを示していた。蔵馬は

足元を見るとそこには……

中学生と思われる人が三人いたのだった。

(逃げ遅れか……!)

足元に気を取られ使徒の接近を許した。使徒の鞭がうなる。

思わず両の手で受け止めた。しかし、エヴァの手が高熱を発した
鞭で溶け始める。

蔵馬の腕にも熱さと痛みが走る。

(しまった! このままでは俺はともかく足元の人たちが危ない
!)

第捌話 ダブルノックアウト

「！？ 避難してなかつたのね！」

「避難遅れというより、好奇心で見に来たとこいつといふかしら？」

「リツコ、なんでそんなに冷静なのよ……」

「ミサト、それよりどうするの？」

「使徒はエヴァが、秀一君が抑えてる。でも長くやう持たない。

戦闘行為もできない。巻き込まれて最悪死んでしまう

〃サトは悩む。しかし、判断を下さなければならぬ。そのと

ても……

『そここの逃げ遅れか見学か知らないが、一いち方に来い』

エヴァの外部スピーカから声がした。

「秀一君！？ 何をする気！？」

『命令違反の懲罰なら十分に後で受けますので、今はこれしかな
いと思います』

そういうと、エントリー・プラグを少し射出。そしてハッチを開けた。

「乗せる気！？」

この動きに反応したのはリツコだった。

「危険よ。そのエントリー・プラグは、パイロット特化型と言つて
間違いないわ。異物が入れば何が起きるかわからないわ

『命令違反の懲罰なら十分に後で受けます』

もう一度そういうと強制的に通信をきつた。

時間がない。投げ飛ばされたときに背中の電源コードが外れてい
たらしい。活動限界までのカウントダウンが表示されている。

エヴァは使徒に押され膝をついていた。いや、中学生三人を登らせるための処置か。どちらにしても藏馬の限界は近い。

(やはりエヴァは背が高い。登るのは無理か。)

秀一は両手で掴んでいた使徒の手を片手に持ち帰る。そして、手を三人の前に差し出した。

『乗れ』

そういうと、三人は手に乗った。そして背中のHントリー・プラグへ持っていくとそのままハッチの中へ放り込んだ。

放り込まれた三人。

「うわあああ、み、み、水う。カメラ、カメラ」

「げぼがぼぐぼがぼ……」

「きやあきやあ、スカートう」

ちらりと見る秀一。眼鏡をかけたカメラを気にする少年。ジャージを着た少年。そして一つに髪を縛ったスカートの広がりを気にする少女。

(少年が見学のために避難所を脱走、気が付いた少女が連れ帰るために避難所を出たというところか。)

問題なさそのなので、ハッチを閉じてエントリープラグを戻す。同時に、エントリープラグ内でエラーが表示された。

『ちよ。ちょっと待ちなさい！ 許可のない民間人を乗せられると思ってるの！？ 秀一君！？』

強制的に通信が入る。ミサトだ。

「もう入れましたが」

さらりと言つ藏馬

『ぐ。仕方ない…… 退却して！ ゲートは34番！ 山の東側

よー』

「了解」

使徒の腕を引き寄せると腹?に蹴りを入れる。腕が切れ吹き飛

んで行つた。

(今の「ひじ」…)

しかし、時間が残つていなかつた。カウントダウンを表示して
いたモニターの色が変わつたのだ。1分を切つた。

(間に合わない！？ ならば…)

『秀一君！？』

「時間切れが近いよつです。何とかします

『なんとかつて……』

また強制切断。

(作戦とか俺に丸投げ状態なんだから黙つてひり)

そう思つ藏馬であつた。

使徒の腕が再生して、こちらに攻撃を仕掛けてくる。その攻撃
をあえて腹で受けた。使徒の腕は貫通し、背中から飛び出す。

「ぐ……・・・」

さすがに苦しい。ファイードバックされる痛みや熱さ。耐えられ
るものではないが、藏馬は耐えた。

その様子を後ろで見ているしかできない三人。

「私たちのために…」

少女がぽつりとこぼした。

「とりあえず動かないでください。終われば俺の一応上官にあた
る人に怒られるかもしれません、自業自得です。覚悟していくく
ださい」

「はい…」

「すんまへん…」

肩からナイフを取り出す。使徒の球体の部分に突き刺した。使徒は苦しむが、こちらへの攻撃はやめない。ここは根性勝負だ。カウントダウンがついに10秒切った。

(間に合つか！?)

腕に力をこめる。深くナイフが突き進む。

そして・・・

エヴァ、活動停止。
使徒、活動停止。

ダブルノックアウトであった。

「ふう」

藏馬は一息ついた。

「だ、大丈夫ですか…？」

少女が恐る恐る声をかけた。

「なんとか…」

「ありがとうございました」

「いや…」

お互い腹を貫通し合った恰好のまま回収された。

格納庫につくと三人は、そのまま黒服の人たちに付き添われて出て行つた。

「秀一君大丈夫？」

「なんとか大丈夫です」

「リツコに検査受けてきて。あの状態で体にどんな影響あるかわからぬから。その後ね、懲罰は」

「わかりました」

（学業優秀、スポーツ万能。人当たりも悪くない。一高校生としては飛び抜けているけど、本当に高校生なの？ 一流の傭兵を相手してるような気がするわ。）

リツコの職務室。実験室と言つても差し支えない様子の部屋だ。
蔵馬はそこへ呼び出される。

精密検査の結果が出たので、それを伝えるためだが、蔵馬に対して何かあると踏んでいるらしい。

「秀一です」

「どうぞ」

「失礼します」

扉を開けて部屋に入る蔵馬。

「精密検査の結果でましたか？」

「ええ。でも特に問題は見つからなかつたわ」

「そうですか。ありがとうございます」

「ただ…」

「何がありましたか？」

「いえ、何でもないわ」

（検査結果に何か出たのか？ 人間ではなく妖怪としての妖狐としてのナニ力が。）

「何か質問ある？」

「えつと、本来はミサトさんに聞くべきかと思うんですが、俺が助けた少年少女たちはどうなりましたか？」

「精密検査においては異常は見られなかつたわ。出ると思つたけど良かつたわ」

「ですか」

一安心する蔵馬。自分自身もよくわからないモノに入れてしまったのだ。何かあつてはたまらなかつた。

「後は、ミサトに怒られてた」

「まあ、そうでしょうね」

「ここからは蛇足だけど」

「？」

「お下げる女の子と眼鏡の男の子の親族は、こことの関係者らしくてね。ミサトから解放された後怒られていたわ」

「なるほど。それは災難でしたね、彼ら」

(……探しを入れてきたのか?)

蔵馬は警戒をする。ただし、顔や態度には一切出してない。

「そうね」

「では。俺はこれで失礼します」

「お疲れさま」

蔵馬はリツコの職務室を退室した。

蔵馬が出て行ってからしばらくして。リツコは精密検査の結果を見ながら溜息をついた。

「かわった子ね。まあ、あの人の息子だからなのかしら? それに……彼、人間?」

精密検査の結果には、不審な点は一切ない。健康そのものであると書かれているようなものだが、リツコは違和感を感じていた。ほんのわずかな違和感を。

「要観察かな。私個人の……」

数日後。倒した使徒のまわりはまるで工事中のビルのように囲われている。

その中では優秀なエルフのスタッフが十数人もかかつて、使徒を調べている。リツコの姿もあった。

そこに、蔵馬を伴つたミサトがやつてきた。

「あら、ミサト。いらっしゃい。どうかしたの？」

「ちょっと、調査結果聞こいつかと思ってね。秀一君はおまけ？」

「おまけは酷いですね、ミサトさん。俺は使徒についてわかれぱ

つて思ったですよ」

「あら、使徒について知つてどうするのかしら？」

「初戦と二回目、作戦らしい作戦もありませんでしたし、死にた
くありませんから、少しでも知つておこうかと思いまして」

「なるほど」

「酷い、しゅ～ちゃん」

納得顔のリツコにぶーたれるミサトであった。

それはわずかな間でミサトの顔つきが変わる。

「で？ なにかわかったの？」

リツコが手元のキーボードを操作する。すると田の前のディス
プレイに601の文字が表示された。

「？ ……なに？ これ？」

「解析不能のコードナンバーよ」

「解析不能のコードナンバー？ つまり、わけわかんないって事

？」

「そうね。わかりやすく言えばそういう感じだよね」

「でも、動力源はあつたんでしょう？」

「らしきものはね。でも、一つだけわかったわ」

「一つ…？ 弱点でもみつかった？」

再び、リツコがキーボードを操作する。

「… これって…」

覗き込むように見るミサト。

「そう、人間の遺伝子と酷似してるわ。99・89%ね」

「99・89%… それって、エヴァと同じ…」

「エヴァと同じ？」

蔵馬が口を挟んだ。

「そうよ」

「そういえば、エヴァって人造人間でしたね」

「巨大ロボットに見えなくもないけどそのなのよ」

「見た目はともかく人間のような体型ですから、納得は多少できます。が、使徒はどう見て人間に見えませんね」

「そうなのよ。改めて、私達の浅はかさを思い知らせてくれるわ」リックはため息をついた。科学者として色々とかかわってきた彼女であるが、使徒ほど理解を超えるものはないらしい。

「そのようですね」

（まったく、俺はとんでもない所に来たようだな。……ん？）

蔵馬は、ゲンドウと冬月が来ていることに気が付いた。どうやら使徒の死体を見に来たようだ。

そこで、素早く二人の会話を聞き取ろうと集中した。

「これがコアかね？」

冬月がスタッフに聞いた。スタッフはいったん作業をやめて冬月に説明を行う。

「ええ。これ以外は劣化が激しく、サンプルとして問題が多すぎます」

「そうか……南野どうする？」

「かまわん。他は全て破棄だ」

「わかった。情報を集められるだけ集めて破棄だ」

「了解しました」

スタッフはそういうと責任者の方へ向かって、ゲンドウの命令を伝えた。

(破棄か……やうだらうな。あれだけ巨大な使徒を保存していく場所もないだろ?)

蔵馬はそう思つ。そのとき、ゲンドウが何気に手を後ろに組むのを見た。その手が火傷で覆われていた。

(あれは…)

「どうしたの?」

不意にミサトが声を蔵馬にかけた。会話に参加していたはずの蔵馬から反応が一切なくなつたので心配になり声をかけたのである。

「いえ

「あら、南野司令来てたのね。そっか、秀一君、司令を見てたの

ね

「はい。……父さん、手のひら火傷してますね」

「火傷? リツコ知つてる?」

「貴女がここへ来る前、零号機の実験中に事故があつたの。聞いてるわね」

「聞いてるわよ。あの司令が素手でエントリー・プラグのハッチを開けてレイを助けたつて聞いたとき、驚いたわ~」

信じられないわよ、といふ顔をするミサト。それを見て呆れるリツコ。

「そんなことがあつたんですね」

「その時のものらしいわ」

「怪我してかなり危険な綾波さんを出撃させようとした父さんとは同一人物とは思えないですね」

「意外に毒舌なのね」

「そうでもないと思いまますよ」

(秘密もあるのか…? 綾波レイには…?)

第拾話 綾波レイ

しばらくして、リツコに呼び出されてリツコの私室。

「何か御用ですか？」

藏馬は内心疑りながら答える。表情には一切出ていないが。
「帰るところじめんなさいね。ちょっとお願ひがあるんだけどいい
かしら？」

「人体実験は申し訳ないのですがお断りします
さらりとひどいことを言う藏馬。

「そんなことしません！ つて誰から聞いたの？」

「ミサトさんです。真顔でそんなことを言つていました」

田はおもつゝきりからかいの田だつたが、とは言わない藏馬。

「ミサトめ…… 秀一君になんてことを…… 後で覚えておきなさい…
！」

「人体実験以外に何がありましたか？」

「秀一君……」

あきれるリツコ。

「すみません。本題はなんでしょうか？」

「ああ、ごめんなさい。これを届けてほしいのよ」

机の引き出しから一枚のカードを取り出し、机の上に置いた。

「これは？」

「綾波レイの更新カード。渡すの忘れちゃつた。明日でもいいので、
本部に来るときに届けてくれないかしら？」

「なるほど…… わかりました届けます。でも俺、彼女の家知りませ
んよ？」

リツコは住所の書かれた紙を取り出す。

「彼女の住所よ。これでいいかしら？」

リツ「から紙を受け取り、読んでみる。

(マンモス団地と呼ばれる場所……彼女こんなことに住んでるのか。しかしこれで、綾波レイ……彼女の事を知ることが出来るかもしれない……)

蔵馬は漆の住んでいたマンションにやつて来た。マンモス団地と呼ばれている場所である。

元々は、都市建設に従事した人々が住んでいたマンション街であったが、使徒の襲来による疎開で今では人の気配は全くない。対使徒のための設備建造のため、道路を挟んだ反対側のマンションの大半は壊されている。まさに廃墟と言つても差し支えない。

(…… 4号棟の2階だつたな。)

住所の書かれた紙を眺めながら歩く蔵馬。

(人の気配が全くない。それどころか、妖氣や靈氣類も全く感じない。こんなところに住んでいるのか。)

4号棟を見つけ、2階へ階段で上がっていく。そしてレイの部屋の前についた。

(俺が思うべきことではないが、女の子の住むような場所ではない。裏に何かあるとしか思えないが。)

蔵馬はインター ホンを何回か押すが、鳴った気配は無い。

(故障か……)

「綾波さん？ いないのか？」

ドワーノブに手をかけると、カギが開いてることが分かった。

(不用心だな。)

不審に思いながら、ドワーノブを開け中を覗き込んだ。

目の前には殺風景な部屋があつた。簡易的なベット、カラー ボックス、小さな冷蔵庫が見える。

(……これが女の子の部屋なのか。)

蔵馬は女の子とは無縁の生活を送ってきた、自ら人との接触を避けて… だが、これは酷いと思った。

(父ちゃん…… いや、あの組織が何を考えているか知らないがこれは酷すぎる。ミサトさんに話してみるか。あの人の性格上なんとかするだらう。)

人を避けているようすで、人物はよく観察している。これも昔からの習慣に近い。

そこへ、レイが奥から出でてきた。

「!?

流石の蔵馬も驚いた。シャワーから出たのだらう、肩からバスタオルをかけた状態のまま出でてきたのだ。

「何?」

「カードを届けに来たんだ。リツ」「さんがこれを渡すの忘れたそうだ」

蔵馬はレイに背を向けて、一枚のカードを取り出した。そしてそのカードの玄関わきの棚の上に置いた。すると、後ろから澪のぺたぺたと歩み寄りしていく音が聞こえる。

「そう」

「それから…」

「何?」

「自分の部屋だからって、玄関まで裸の状態で出てくるのはよくないよ」

「そう」

その返事を聞いて、蔵馬は玄関を出てマンションの外へ出た。

そして、レイの部屋を見上げながら思つ。

(羞恥心とか無いのか? あの少女は…… それに感情というものが感じられない。)

数日後。零号機の起動実験が行われる日。

蔵馬は途中でレイを見つけ一緒に歩くことになった。探るためにもあつた。

「綾波さんは怖くないの?」

「何が?」

「エヴァに乗るのが

「貴方は怖いの?」

(……別に怖くはないが。魔界では日常茶飯事だったしな。怖いと言つてみるか、何か引き出せるかもしねり。)

「怖い……かな。怖くないっていう方がおかしいと思う」

「そう。貴方はお父さんの仕事信じられないの?」

「父自体信じてない」

蔵馬がそう言つと、レイはすつと蔵馬を見た。

「私は信じてるわ。信じられるのは司令だけ」

そう言つと少し足早に歩いて行つた。

(どうやら闇は深そうだな……)

零号機起動実験直後、使徒接近の報が入る。ただちに実験は中止された。

作戦本部に戻った蔵馬たちは、ディスプレイ上に映し出された使徒に驚愕する。

「なんですか、あれ？」

ほぼ正八面体の幾何学的形状。どう見ても人類の生物学的概念からかけ離れている。そのようなモノが映っていたのだつた。

「使徒よね……？」

蔵馬の質問に答えるミサト。

「パターーン青ですので、使徒だと思われます」

オペレーターが表示されているデータからそう判断したが、本人も信じられぬモノであった。

「体？に景色写つてますね……えっと生物なんでしょうか？」

「多分としか」

「なんか常識がおかしくなりそうです」

蔵馬は素直に思った。その思いは一部の人々を除いて同じだ。「最低でも人型してれば、様子見ながら対応できそうだけど、さすがに無理そうね」

飛行中の使徒が一定の場所に停止した。そして、下部からドリルのようなものが飛び出し掘削を始める。

「今度は何！？」

「この位置は……！！ 使徒、ジオフロント内ネルフ本部へ向かい穿孔しています！」

オペレーターが解析して叫ぶ。どうやら直接攻撃を仕掛けてきたらしい。

「なんですって！！」

形状からして情報が少なすぎる使徒に対し、情報を集める。そして作戦会議が始まった。

「これまで採取したデータによりますと、目標は一定距離内の外敵を自動排除するものと推測されます」

ために使用した武器はすべて使徒に消滅させられていた。「エリア侵入と同時に加粒子砲で100%狙い撃ち。エヴァによる近接戦闘は危険すぎますね」

「A・T・フィールドはどう？」

「健在です。相転移空間を肉眼で確認できるほど強力なものです」

「生半可な攻撃では泣きを見るだけですね。こりや」

「攻守ともにほぼペーぺキ。まさに空中要塞ね。で？ 問題のシールドは？」

「現在、我々の直上、第三新東京市0エリアに侵攻」

「巨大なシールドがジオフロント内のネルフ本部に向かい、穿孔中です」

「冗談抜きで敵はここに直接攻撃を仕掛けるつもりですね」

「しゃらくさい。で？ 到達予想時刻は？」

「明日午前0時6分54秒。」

「その時刻には、全ての装甲防御を貫通してジオフロントに到達するものと思われます」

「あと、10時間足らずか……」

「10時間しかないのか、10時間もあるのか。どうりでしても時間はあまりないとミサトは思う。

もつ、白旗あげちゃうかななどと不謹慎なことを考えた瞬間、閃いた。これなら不可能ではないと。ニヤリと笑った。

「か、葛城さん…？」

横にいた日向マコトはその顔を見てビビった。

「いいこと閃いたやつだ。やってみたいことがあるの。」

「田標のレンジ外、超長距離からの直接射撃かね？」

「ミサトからの作戦を聞いたゲンドウと冬田。冬田はゲンドウを代弁するように言った。

「そうです。高エネルギー収束帯による一点突破しか方法はありません」

「MAGIはなんと聞っている？」

冬田はリシコに聞く。そこでリシコは端末に表示されているMAGIの回答を見せる。

「MAGIによる回答は、賛成2、条件付き賛成が1でした」

「勝算は0・87%か。高い数値ではないな」

「ですが、最も高い数値です」

「そうか」と渋い顔をする冬田。

「ほかの作戦は？」

「ありません」

きつぱり言い切るミサト。冬田はリシコをちらっと見ると、リシコのその通りといつ顔をしてくる。

「そうか」

沈黙し、話を聞いていただけと思われていたゲンドウが口を開いた。

「超長距離射撃。反対する理由はない。やりたまえ、葛城一尉

「はい」

最高司令官の許可が下りた。

作戦名『ヤシマ作戦』。

作戦内容、二子山の山頂からポジトロンライフルで使徒を超長距離射撃。

た。

(「れ、ぴつちりで着心地悪いな。まあ、妖狐の姿に代わる必要性もないし。問題ないかな。）

頭の中で愚痴つているとレイがやつてきた。まだ制服姿だった。

「綾波さん」

レイは藏馬を一瞥すると、手帳を取り出し、読み始める。

「明日、午前0時より発動されるヤシマ作戦のスケジュールを伝えます。南野、綾波の両パイロットは本日17：00ケイジに集合。18：00 H'ヴァンゲリオン初号機、及び零号機、起動。18：05出動。同30二子山仮説基地に到着。移行は別名あるまで待機。明日0：00 作戦行動開始」

一気に読み終えるとすぐに手帳をしまった。

「どんな作戦なのかな？」

「二子山からH'ヴァによる超長距離からの直接射撃。」

「…？ A・T・フィールドを中和せずに？」

「そうよ」

(使徒の田の前に射出されたみつまシか。でも思い切った作戦にでたな。)

蔵馬は少し考えた。現状最善のよつな気がした。そして時計を見た。16時をさしていた。

「60分後に出発よ

その様子を見ていたレイが言った。

「了解

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3941z/>

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

2011年12月20日21時50分発行